



米国人教授とその御家族をお迎えして

齋藤 公 男*

○ ま え が き

今年は1月から数か月間英語を身近にした生活が体験でき、少々肩のこることもあったが、貴重な機会をもつことができた。と言っても、海外生活によるのではなく、東京・大阪で開かれた国際シンポジウムに出席したのと、会議後4月15日まで約2か月間日本学術振興会外国人招へい研究員としてミシガン大学教授のオグルビー先生がわが大学に御家族3人とともに滞在されたからである。先生の御滞在中は造船学科の教職員が公私両面からお世話し、私もその一員として先生に親しく接することができた。こ



* 齋藤公男 (KIMIO SAITO), 大阪大学, 工学部造船学科, 助手, 造船学

の間に私が受けた印象を断片的ではあるが書いてみたい。

○ 先生のこと

先生は現在ミシガン大学工学部造船造機学科の主任教授として活躍されているが、学生時代は理論物理学・航空工学を専攻せられ、その造船学の分野に対する理論的考察は、我々にとって非常に魅力的であった。学部・大学院生に対して行われた数回の講義も非常に格調の高いもので、多くの若者が刺激を受けたものと思われる。

大学における先生は、毎日講演用レポートの作成やミシガン大学との連絡のため盛んにタイプライターを使っておられたが、そのスピードたるや驚異的で、ピアノ演奏のようであった。そんなときにも我々が教授室 (Office) を訪ねると気持良く応待下さって、どんな質問に対しても丁寧にお答えになられた。特に、先生は若者との議論を非常に望んでおられた。

米国における教育・研究体制についても色々御意見を 受け賜ったが、以前本欄 (昭51, Vol. 28-1) で、今中忠行氏が述べておられたように、非常に厳しいもので、特に若い研究者は各地の大学・研究所・会社を転々として実力をつけていくそうで、それは、まるで昔、武芸者が武者修行しながら技を磨いたのに似ていると思った。

○ 御家族のこと

御家族の構成はジョーン夫人、メリー嬢およびケン君である。メリー嬢は昨年カリフォルニア工科大学電子工学科を卒業し現在ロサンゼルス会社に勤務中で、ケン君は高校在学中であった。大学のすぐ近くにある蛋白研共同宿舎に滞在されていたので、御家族と親しくなるのに

好都合であった。また、皆さんが日本という異質な文化を理解しようとかかなりの予備知識を持って来られ、滞在中も常に努力されていた。

ケン君は囲碁に興味を持ち、毎夕我々の研究室にやってきては囲碁を楽しみ、わずか2か月の間に7～8級程度の腕前にまで上達し、同室の者をびっくりさせた。

一方、メリー嬢は平仮名・片仮名を短期間にマスターし、時刻表を解説しては自分で旅行のスケジュールを立てて楽しんでた。滞在中、2人はユースホテルを利用して中・四国および九州各地をホステリングし、日本を直接見聞して理解しようといかにも米国の若者らしく行動的で意欲的であった。

御夫妻も短期間の間に精力的に講演旅行を兼ねて子供達とは別に各地を旅行された。特に夫人は、神社仏閣に大変興味をお持ちで、我々も2度程京都へ御案内したが、金閣寺の静かで荘厳なたたずまいや、桜につつまれた清水寺を御覧になったときは、うっとりとしておられた。建物内部にも細かく目を配られ、その建築様式や部屋の目的等にまで話が進み、また、二条城では襖絵の作者のことまで質問され、我々もたじたじであった。京都からの帰路観覧した歌舞伎にも非常に興味を持たれ時間のたつのも忘れて楽しんでおられた。この小旅行を通して、私共も日本の伝統的文化や芸術のすばらしさを再認識させられた。

○ 言葉の障害

造船学科で行われた講義や日常語もすべて英語で、始めのうちは話される調子が速くてなかなかうまく受け答えできなかった。語学には前から興味があり、趣味として英会話テープなども聞いていたが、随所で語学力不足を痛感した。しかし、日がたつにつれ、我々も先生の英語をかなり聞き取れるようになり、先生も我々

の片言で意を解されたので、電話でも気軽にお話しできるようになった。

以上は、我々の側からみた言葉の障害であるが、こちらで生活される御家族の側からみた言葉の障害もあった。先生方は以前英国に1年半程滞在されたが、そのときは言葉の障害はなく、今回はその点でも苦勞されたものと思われ。例えば、御用聞きの人に注文したスキムミルクがなかなか通じなかったとか、ライスを注文すると大きな袋入りを持ってきたとか……。また、管理人さんとは身振り手振りで意を伝達したとか。

このように、お互いに言葉の障害があったため、十分お世話できたとは思われないが、幸いだったことは、先生が単身ではなく御家族とともに滞在されたことと、日本および日本人を理解しようとして常に心掛けておられたことだと思う。

○ むすび

以上わずか2か月間ではあるが、米国人教授と英語を身近にした生活から次のような感想ももった。

外国人教授を招いての特別講義は最近、他学科でも行われており、国際会議も日本で数多く開催されるようになってきたが、そこで討論できるためには専門分野での研究活動は勿論であるが、共通語である英語による表現能力の向上の必要性を身をもって体験させられた。

私にとって今年是在職6年目で、ともすればマンネリ化する時期において、現在取組んでいる研究テーマに対する理論的なアプローチを先生から示して頂いたことは、非常に良い刺激と感じており、今後この刺激を有効に生かして、再び先生とお会いし、議論できる日を楽しみに努力しようと決意している今日この頃である。